

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2014年11月20日放送

「第113回日本皮膚科学会総会①

会頭講演 皮膚科の職人魂

岡山大学大学院 皮膚科学
教授 岩月 啓氏

第113回日本皮膚科学会総会を国立京都国際会館におきまして、平成26年5月30日から6月1日の3日間、盛会に開催することができました。参加いただきました皆様にはお礼申し上げます。

皮膚科の職人魂

夏のような暑さの中での学会になりましたが、それにも増して会場内は熱気にあふれる講演が続きました。総入場者はちょうど6,000名で、国立京都国際会館ほどの会場もにぎわっていました。会場外に設置しましたモニターでも、多くの皆様が熱心に聴講されておられ、主催者としては申しわけない気持ちとともに、ありがたい気持ちでいっぱいでした。

このたびの総会のテーマである「皮膚科の職人魂」を参加の皆様から感じ取ることができ、主催者の意図が共有されていると実感いたしました。

このたびの総会の「皮膚科の職人魂」というテーマは、皆様にとって大変インパクトがあったと聞いています。私がこのテーマを選んだ理由を少し述べさせていただきます。

最初に私は、皮膚科に必要な要素は何だろうかということを考えました。そして、知識と技量と心の3つが浮かびました。第111回総会では、大塚藤男先生が「知と技を磨く」、第



112回総会では、川島 眞先生が「いま望まれる皮膚科心療」として、“心”の療というテーマをスローガンにされました。

私は、「仕事への情熱」や「プロ意識」を加えた心を表現するインパクトのある言葉は何だろうかと考え、スピリッツ=魂を選びました。すなわち、知と技と心のほかに、もう1つ私が組み入れたかったのが「プロ意識」です。

ドイツの職業教育制度でありますマイスター制度、つまり徒弟制度に倣うようなプロ意識です。今、皮膚科で足りないのが、先輩から丁稚奉公しながら教わる徒弟制度のような研修制度が、プロの皮膚科医育成には必要ではないかというふうにかねてから思っていたためです。

情報過多の時代にあって、医師は診療に必要なノウハウを覚えるということだけではなく、先輩が持っている3つの要素、「知・技・心」を一緒に暮らしながら、働きながら学びとり、さらに自己研鑽して真のプロフェッショナルを目指してほしいという思いを今回のテーマに込めました。



会頭講演から

会頭講演では、岡山大学と皮膚科学教室の歴史を編集したビデオを上映いたしました。昨年（2013年）の岡山大学皮膚科学教室100周年記念で準備したビデオを再編集して用いました。それに続き、時空を超えて継承される「皮膚科魂」に焦点を当てて、会頭としての私自身の想いを込めて述べさせていただきました。

第113回日本皮膚科学会総会では、セッション間に上映された教室員総出演のCMビデオが大人気でした。重厚な品格を重んじる岡山大学皮膚科学の伝統とは大分違ったイメージでしたが、大学医局の様子を身近に感じていただけたのではないかと思います。

倉敷は日本のジーンズ発祥の地と言われています。そこで、倉敷児島ジーンズのコングレスバッグとドクタージーンズを地元企業と協働で製作し、岡山色を出しました。「これだけしかないという予算でコングレスバッグをつくってほしい」というむちゃな要求をいたしました。大赤字を心配する社員の反対を押し切って、ジーンズ会社の社長が引き受けてくださいました。その社長にも職人魂を感じました。

スイーツにはきび団子を予想された参加者が多かったのではないかと思います。その期待にサプライズを加えて、今回は日本皮膚科学会総会ロゴ入りのきび団子を用意いたしました。学会のお土産用に準備したものが完売するほどの人気でした。



学会プログラムから

さて、肝心の学会プログラムに話を進めましょう。

土肥記念国際交換講座の講演は、抗菌ペプチドと自然免疫を専門とするリチャード・ギャロ教授をお招きし、“A Journey to Expand Understanding of the Complex and Beautiful Skin Immune System”と題した立派な講演をいただきました。「土肥記念」の名前にふさわしい格調高い講演会にするために、ホテルでの講演会にいたしました。会場定員があり、事前申し込みを受け付けましたが、学会本会場にも同時中継をいたしました。

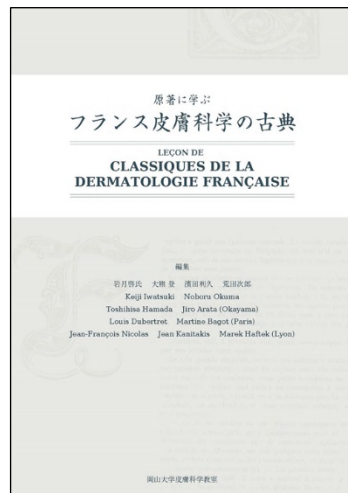
特別講演では、日本専門医機構の池田康夫理事長をお迎えして、新専門医制度についての基調講演と、時間をかけて質疑応答することができました。

今回の総会では、皮膚科最新知見を横断的かつ解說的に講演していただく「皮膚科トピックスを読み解く」を企画いたしました。その基礎編は、初日に京都大学大学院の梶島健治先生と東北大学大学院の山崎研志先生が、そして第3日目には臨床編として札幌厚生病院の高橋博之先生と帝京大学の多田弥生先生にご講演いただきました。会場は多数の聴衆で埋まり、学術論文を読むだけではなかなか理解できないポイントを、2時間足らずのご講演でしたがとてもわかりやすく解説していただき、知識のリニューアルができました。講師の先生方が主催者の意図を理解していただき、周到に準備され、実に簡潔に読み解いてくださったと感謝しています。

本総会から、一般応募演題の中からアブストラクト賞を選び、久しぶりに総会に口演が戻りました。アブストラクト賞の選定は、プログラム委員会で第一選考、次いで岡山大学皮膚科で選考し、日本皮膚科学会学術委員会にて承認をいただきました。厳密な選考を通過した27演題は、いずれもすぐれた演題でした。

岡山大学皮膚科学教室100周年記念事業とも関連させて準備を進めてきた歴史的資料と刊行物を総会で配付いたしました。「原著に学ぶ：フランス皮膚科学の古典」は、約200年前にアリベールが記載した菌状息肉症から、フランス皮膚科の黄金時代の原著15編を完訳したものです。「皮膚科アトラス集vol. 1」と「久山倫代歌集」を準備いたしました。ポスターやプログラムに使わせていただいた故香曾我部暁彦先生の作品もお楽しみいただけたものと思います。

Agora for Asian Dermatologistsは私のこだわりを押し切った企画でした。アゴラは古いギリシャ語の皆が集まって自由に討論する広場を意味しています。現代ではマーケットのような意味で使われているようです。日本の皮膚科学がアジア皮膚科学をリードするのであれば、アジアの若手が参加できるセッションが欲しいと常々考えていました。私自身、バンコクの皮膚科diploma courseに参加し、教え、教わる満足感を体験してから、この思いはさらに強くなりました。いわば国境を越えた「職人魂」の継承と言えるかもしれません。大げさかもしれませんが、アジアに



対して日本皮膚科学会総会の門戸を開いた総会になりました。

もう1つの門戸を開いた企画は、ナース、コメディカルのためのOne day講習会です。皮膚科スペシャリティナース講習会を拡大する形で、総会第3日目の1つの会場だけは、ナース、コメディカルの聴講を可能にいたしました。450名の定員でしたが、500名を超える参加者があり、慌てて席を準備いたしました。皮膚科処置の理論と実践を正しく理解できたと、多くの参加者がコメントしてくれました。

皮膚科診療におけるナース教育や処置介入はどうあるべきか、解決すべき問題は多いですが、職種を超えた「職人魂」の共同は、必ずや皮膚科学を強くするものと期待しています。

おわりに

ご参加いただいた皆様に心からお礼申し上げます。

私の途方もない企画案の真意を鋭く察して、細かい気配りで実現させてくれた青山裕美事務局長、また、ユニークな企画を進めてくれた山崎修実行委員長と教室委員、またプログラム委員としてご活躍いただいた同門や岡山地方会の先生方に心から感謝申し上げます。

学会運営のパートナーとして活躍していただいた吉山様、田尻様と、日本皮膚科学会事務方には、仕事を超えてお世話になりました。皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。